

Title	アダム・ スミスの「道徳感情の腐敗」論
Sub Title	Adam Smith's discussion of the corruption of moral sentiments
Author	柘植, 尚則(Tsuge, Hisanori)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2013
Jtitle	エテ ィカ (Ethica). Vol.6, (2013. ) ,p.19- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アダム・スミスの「道德感情の腐敗」論

柘植尚則

周知のとおり、アダム・スミスは、『道德感情論』(*The Theory of Moral Sentiments*, 1759; 6th ed., 1790)<sup>1</sup>において、道德判断を感情と捉え、その本性について論じている。スミスによれば、道德判断とは、観察者の道德的な是認・否認の感情である。観察者は、想像力によって当事者の立場に立ち、一定の情念を得る。そして、その情念と当事者自身の情念を比較して、両者が一致する場合には是認の感情を抱き、一致しない場合には否認の感情を抱く。こうした道德的な是認・否認の感情を、スミスは「道德感情」(*moral sentiment*)と呼んでいる。

ところで、スミスは、道德感情の本性について論じるだけでなく、道德感情の「腐敗」(*corruption*)についても論じている。スミスによれば、他人の喜びに共感する性向は、他人の悲しみに共感する性向よりも強い。そこで、人間は、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向をもつ。そして、その性向のために、道德感情の腐敗が生じる。このように、スミスは道德感情の腐敗を人間の性向から説明している。

だが、道德感情の腐敗に関するスミスの議論は、道德感情の本性に関する議論に比べて、それほど注目されてこなかった。また、その議論は錯綜しており、問題もいくらか見出される。そこで、本稿では、道德感情の本性に関する議論について見たうえで、道德感情の腐敗に関する議論について検討し、議論の内容を明確にするとともに、その問題点を指摘することにした<sup>2</sup>。

## 1 道德感情の本性

まず、道德感情の本性に関するスミスの議論について見ていきたい。スミスの考えでは、道德感情は次のようにして成立する。ある当事者の情念について判断する場合、観察者は、まず、想像力によって当事者の立場に立ち、(当事者と同様の)情念を得る<sup>3</sup>。次に、その想像上の情念と、当事者自身の情念(と推測されるもの)を比較する。そして、両者が一致するときには、当事者の情念を適正なものと感じ、それを是認する。反対に、両者が一致しないときには、当事者の情念を不適正なものと感じ、それを否認する。そうした是認や否認の感情が道德感情に他ならない。スミスは道德感情について以下のようにまとめている。

当事者の本来的な情念が観察者の共感的な情緒と完全に調和するときには、必ず、それらの情念は観察者にとって正当で適正であり、情念の対象にふさわしいように見える。反対に、観察者が〔当事者の〕事情を自分のものとして、自らの感じるものと一致しないことを見出すときには、必ず、それらの情念は観察者にとって不当で不適正であり、情念を引き起こす原因にふさわしくないように見える。それゆえ、他人の情念をそれらの対象にふさわしいものとして是認することは、それらに完全に共感していると述べるのと同じことである。そして、そうしたものとして是認しないことは、それらに完全には共感していないと述べるのと同じことである。<sup>4</sup>

この引用にあるとおり、スミスは道德感情を「共感」(sympathy)と言い換えている。共感とは、まずは、憐れみや同情のような「同胞感情」(fellow-feeling)のことであるが<sup>5</sup>、さらに、(道徳的な)是認の感情のことである。つまり、共感するとは、他人に対して同胞感情を抱くとともに、

他人の情念を（道徳的に）是認することである。このように、スミスは共感をいくらか独自の意味で用いている。

さて、道德感情の本性に関するスミスの議論に対しては、さしあたり、以下の三つの問題が考えられる。

第一に、観察者が想像力によって当事者の立場に立つというとき、それをどこまで行うのか、ということが問題になるだろう。スミスは、それを「想像上の立場の交換」(imaginary change of situation) と名づけており<sup>6</sup>、観察者が当事者と交換するのは、当事者が置かれた立場である、と考えている<sup>7</sup>。ところが、以下の一節では、観察者は、当事者の立場だけでなく、その身体や性格も交換する、と述べている。

共感とは当事者との想像上の立場の交換から生じると言われるのがきわめて適切であるとはいえ、それでも、この想像上の交換は、私自身の身体や性格の内ではなく、私が共感する人物の身体や性格の内、私に起こると想定されるのである。……私はあなたと事情を交換するだけでなく、身体や性格も交換するのである。<sup>8</sup>

立場だけを交換するのか、それとも、身体や性格まで交換するのか、そのいずれを採るかによって、共感や是認の程度は、言い換えれば、道德感情の内容は、ずいぶん違って来るだろう。たとえば、ある犯罪に関して、犯罪者の立場だけでなくその身体や性格も交換するのであれば、その犯罪者に共感し、その犯罪を是認することもありうる。こうした共感や是認を道德感情と呼べるのか、はなはだ疑わしい（もちろん、この場合には、犯罪の被害者の心情も考慮されるので、そう単純ではないが）。このことは、共感と判断とは別である、ということを示唆している。

第二に、道德感情は客観的といえるのか、ということが問題になるだろう。この問題に対しては、スミスは次のように答えている。自分の利害と他人の利害が対立する場合、正しい判断を下すためには、われわれは、

自分でも他人でもない「第三者」(third person)の立場に立つ必要がある。

われわれは、それらの対立する利害を適切に比較しうるまえに、自分の位置を変えなければならない。自分自身の場所からでも、他人の場所からでもなく、また、自分自身の目でも、他人の目でもなく、第三者の場所から、第三者の目で、それらを眺めなければならない。そして、第三者とは、どちらとも特定の関係をもたず、われわれのあいだで公平に判断する者である。<sup>9</sup>

スミスはこの第三者を「公平な観察者」(impartial spectator)と呼んでいる<sup>10</sup>。ここで言う「公平」とは、特定の利害をもたない、あるいは、利害にまったく関わらない、ということである。そして、スミスは、この公平な観察者の立場に立つことで、道德感情は客観的になりうる、つまり、利害による偏りが取り除かれることで、人々の道德感情はおおむね一致する、と考えている。しかし、公平な観察者の立場に立つことで、道德感情の偏りを正せるとはいえ、そのうえでなお、道德感情が人によって異なることもありうる。なぜなら、感情は価値観の影響を受けやすいので、公平な観察者であっても、価値観が異なると感情も異なるからである。したがって、特定の利害をもたない、あるいは、利害にまったく関わらないことが、それだけで、道德感情の客観性を保証するものにはなりえない。

第三に、そもそも、道德判断は感情であるのか、ということが問題になるだろう。一般に、道德判断は(理性や知性によって見出される)道德的な法則や規則に依拠して個々の行為を評価するものと考えられている。それに対して、スミスは、個々の行為に対する道德判断(道德感情)に基づいて「道德の一般的規則」(general rules of morality)が形成されると主張している。

それら〔道德の一般的規則〕は、究極的には、個々の事例において、

われわれの道徳的な能力、価値や適正さに関するわれわれの自然な感覚が、何を是認ないし否認するか、という経験に基づいている。われわれは本来、個々の行為を検討して、それらがある一般的規則に合致している、あるいは、相反するよう見えるという理由で、是認ないし非難するのではない。反対に、一般的規則は、一定の種類の、あるいは、一定の事情にある、すべての行為が是認ないし否認されるということを経験から見出すことによって、形成されるのである。<sup>11</sup>

スミスによれば、殺人が恐ろしい行為であるかを理解するために、人命を奪ってはならないことが道德の一般的規則の一つであり、殺人がその規則に対する違反であり、それゆえ、非難すべき行為であると省察する必要などない。殺人に対する観察者の嫌悪が、直ちに、一般的規則が形成されるのに先立って、生じることは明らかである。そして、一般的規則は、殺人のような行為が観察者の内に生じさせる嫌悪に基づいているのである<sup>12</sup>。

もっとも、スミスの考えでは、道德の一般的規則が形成され、人々のあいだで承認され、確立されたのちには、一般的規則が道德判断の基準とされる場合もある。また、一般的規則は（自己愛による）誤った考えを正すのを助けるものであり、多くの人は、一般的規則を顧慮することによって、自分の行為を方向づけることができる<sup>13</sup>。

とはいえ、道德判断は感情であり、道德感情は道德の一般的規則に先立ち、後者は前者に基づいて形成される。そのことに変わりはない。こうしたスミスの立場は、現代の倫理学で言えば、道德判断の本性に関する「感情主義」、道德判断の方法に関する「個別主義」、道徳的な法則や規則の地位に関する「規約主義」と言える。感情主義は「合理主義」と、個別主義は「普遍主義」と、規約主義は「客観主義」と対立しており、現代の倫理学でも、対立する立場のあいだで活発な論争が行われている。ここでは、それらの論争に立ち入る余裕はないので、スミスの議論が一方の立場に立つものであることを指摘するに止めたい。

以上、道徳感情の本性に関するスミスの議論について見てきたが、スミスは道徳感情の作用についても論じている。そこで、その議論についても見ておきたい。

道徳感情の作用とは、観察者の道徳感情が当事者に影響を与える、というものであり、具体的には、観察者から是認されることを、つまり、共感されることを求めて、当事者が自分の情念を抑える、というものである。スミスによれば、当事者は、観察者が自分の情念に共感することに喜びを感じ、観察者からの共感を求める。だが、観察者が当事者と同じ程度の情念をもつことはないし、観察者による共感も一時的なものにすぎない。そこで、当事者は、観察者からの共感を得るために、自分の情念を、観察者がついていける程度まで抑えようとする<sup>14</sup>。

彼が、公平な観察者が自分の行動の原理〔情念〕に入り込めるように行為しようとするならば、それは、あらゆる物事のうちに、彼が最も欲していることなのだが、彼は、他のすべての場合と同じく、この場合にも、自分の高慢な自己愛を謙虚にし、他の人々がついていけるようなものにまで引き下げなければならない。<sup>15</sup>

スミスの考えでは、人は他人から共感されることを何よりも望んでおり、そのために、自分の自己愛を抑えて行為するようになる。このような仕方では、道徳感情は行為に影響を与えるのである。スミスは、他人からの共感を求めて自分の情念や行為を抑えるという人間の性向を、繰り返し強調している<sup>16</sup>。それはスミスの道徳感情論における大きな特徴である。

## 2 道徳感情の腐敗

ここからは、道徳感情の腐敗に関するスミスの議論について検討することにした。冒頭で述べたとおり、スミスは道徳感情の腐敗を人間の性

向から説明している。その性向とは、「裕福な人」(the rich)や「地位の高い人」(the great)に感嘆し、「貧しい人」(the poor)や「地位の低い人」(the mean)を軽蔑する、という性向であり、それはさらに、他人の「喜び」(joy)に共感する性向が他人の「悲しみ」(sorrow)に共感する性向よりも強いことから生じる。そこで、後者に関する議論から検討していきたい。

スミスはまず、喜びへの共感と悲しみへの共感を対照させて、次のように論じている。共感という言葉は、もともと、他人の悲しみに対する同胞感情を表すものであって、喜びに対する同胞感情を表すものではない。その意味で、悲しみへの共感喜びへの共感よりも普遍的である。実際、悲しみへの共感は喜びへの共感よりも顕著である。苦痛は快楽よりも鋭い感情の動きであって、悲しみへの共感は喜びへの共感よりも生き生きとした知覚である。また、人はしばしば、自分が避けたいと思う悲しみに共感してしまい、自分がもちたいと思う喜びに共感しそこなう。そこで、一般には、悲しみに共感する性向は非常に強く、喜びに共感する性向は非常に弱い、と考えられている<sup>17</sup>。

このように論じたうえで、スミスは以下のように述べている。

私があえて主張したいのは、そこに嫉妬がない場合には、喜びに共感するわれわれの性向は、悲しみに共感するわれわれの性向よりも、はるかに強い、ということ、そして、快い情緒に対するわれわれの同胞感情は、不快な情緒に対してわれわれが抱く同胞感情よりも、当事者によって自然に感じられる情動の活気に、はるかに近づく、ということである。<sup>18</sup>

ここでは、二つのことが主張されている。一つは、喜びに共感する性向が悲しみに共感する性向よりも強いこと、もう一つは、喜びに対する同胞感情が悲しみに対する同胞感情よりも当事者の感情に近いこと、である。



だが、なぜそう主張できるのか。スミスはその理由を以下のように説明している。人間の通常の状態に付け加えるものはほとんどないが、その状態から取り去りうるものは多い。その状態と繁栄の極みとの隔たりは取るに足りないが、悲惨のどん底との隔たりは無限である。それゆえ、繁栄が人の心を引き上げるよりも、悲惨は人の心をはるかに大きく引き下げる。そのために、観察者は、当事者の喜びに共感するよりも、悲しみに共感するほうが、はるかに困難に感じる。この理由により、悲しみへの共感、喜びへの共感よりも鋭いにもかかわらず、当事者が感じるものにはるかに及ばないのである<sup>19</sup>。

スミスは二つの主張の理由をこのように説明している。その理由とは、要するに、喜びの場合、当事者の本来の情念と観察者の想像上の情念との隔たりが少ないため、観察者が共感するのは容易であるが、それに対して、悲しみの場合、当事者の本来の情念と観察者の想像上の情念との隔たりが大きい、観察者が共感するのは困難である、というものである。しかし、この理由は第二の主張にしか当てはまらない。なぜなら、(スミスの主張とは反対に) 悲しみに共感する性向が喜びに共感する性向よりも強いとしても、それでもなお、悲しみの場合、喜びの場合よりも、当事者の本来の情念と観察者の想像上の情念との隔たりが大きい、悲しみに共感することは喜びに共感することよりも困難である、と考えることもできるからである。第二の主張が正しいからといって、第一の主張も正しいということにはならない。

また、スミスの挙げる理由そのものも疑わしい。スミスは、健康であり、罪がないことが、人間の通常の状態であり、大半の人間の状態であると考えている<sup>20</sup>。たしかに、そのように考えるならば、人間の通常の状態と繁栄の極みとの隔たりは取るに足りず、悲惨のどん底との隔たりは無限である、と言うことはできるかもしれない。しかし、人間の通常の状態(大半の人間の状態)をそのように考えることが、そもそも恣意的である。考え方によっては、それを悲惨のどん底に近い状態とすることも可能であ

る。スミスの説明は、経験的なものにすぎず、説得力を欠いている。

ただ、その説明に続けて、スミスは、先の理由とは別と見なしうる理由も挙げている。

喜びに共感することは快い。そして、嫉妬が対立しないときはいつでも、われわれの心は、その喜ばしい感情の最高の高まりに満足して身を委ねる。しかし、悲嘆についていくことは苦しく、われわれはつねに嫌々ながらそれに入り込む。<sup>21</sup>

喜びへの共感快楽を伴い、悲しみへの共感苦痛を伴う。スミスはこのことを、先の理由を説明する中で語っているが<sup>22</sup>、それは、厳密には、先の理由とは別のものだろう。そして、それだけを理由として、第一の主張を唱えることも、つまり、喜びへの共感が快楽を伴い、悲しみへの共感が苦痛を伴うがゆえに、喜びに共感する性向は悲しみに共感する性向よりも強い、と主張することもできるだろう。

もっとも、そのように主張するためには、当事者の喜びや悲しみの対象（原因）が観察者の関心の対象でもあることが前提されていなければならない。当事者を喜ばせたり悲しませたりするものに、観察者が関心をもっていなければ、共感そのものが成り立たない。観察者自身が、そうしたものに関心をもっているからこそ、当事者の喜びや悲しみに共感することができるのである。

さて、先に述べたとおり、スミスは、他人の喜びに共感する性向が他人の悲しみに共感する性向よりも強いことから、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向が生じると論じている。続いて、そちらの議論について検討していきたい。

スミスによれば、人は富を見せびらかし、貧困を隠そうとするが、それは、人々が他人の悲しみよりも喜びに共感する傾向をもっているからである。

この世のすべての争いや騒ぎは何のためか。貪欲や野心の目的、富や権力や優越の追求の目的は何か。……さまざまな階級のすべてで繰り広げられている競争はどこから生まれるのか。境遇の改善と呼ばれる、人生の大きな目的によって、われわれが得ようとしている利益は何か。共感や好意や是認でもって、見られること、注目されること、気づかれることが、そこから引き出そうとすることのできる利益のすべてである。われわれの関心を引くのは、安楽や快樂ではなく、虚栄なのである。

たとえば、裕福な人が富を誇るのは、富がおのずと世間の注目を集めることを、そして、人々が自分の立場の有利さに伴う快い感情についていく傾向をもっていることを、感じ取っているからである<sup>23</sup>。

スミスはこのように論じて、貪欲や野心、富や権力や地位の追求、競争、生活の向上が虚栄心に基づくと主張している。また、引用から推察されるように、スミスは虚栄心を、（先に見た）他人からの共感を望むという人間の性向そのもの、もしくは、そこから生じるものと捉えている。言い換えれば、スミスの考えでは、他人からの共感を望むという人間の性向は、自己愛を抑える一方で、虚栄心となるか、それを生じさせるのである。

ただ、ここで論じられているのは、人間が虚栄心をもつとともに、富などに感嘆する性向をもつがゆえに、貪欲や野心などが生まれる、ということであって、（他人の喜びに共感する性向が他人の悲しみに共感する性向よりも強いことから、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向が生じる、という）肝心の議論はなされていない。とはいえ、それは後続の議論のうちに見出すことができる。スミスは以下のように述べている。

われわれが地位の高い人の境遇を、想像力が描きそうな偽りの姿で考

える場合、その境遇は、完全で幸福な状態についての抽象観念と言うべきもののように思われる。それはまさに、白昼夢やくだらない妄想のなかで、われわれが自分のあらゆる欲望の究極の対象として素描してきた状態である。それゆえ、われわれは、そうした状態にある人々の満足に特別な共感をもつのである。<sup>24</sup>

これでも十分な説明になっていないが、スミスの考えに従えば、次のように解することができるだろう。人はそれぞれ完全で幸福な状態を日頃から思い描いており、裕福な人や地位の高い人がそうした状態にあると想像すると、喜びに共感するのが容易である（あるいは、喜びへの共感が快楽を伴う）こともあって、それらの人々の喜びにいつそう強く共感し、彼らに感嘆する。反対に、貧しい人や地位の低い人が完全で幸福な状態の対極にあると想像すると、悲しみに共感するのが困難である（あるいは、悲しみへの共感が苦痛を伴う）こともあって、それらの人々の悲しみにますます共感できず、彼らを軽蔑したり無視したりする。

このように解することができるとすれば、先に指摘したように、当事者の喜びや悲しみの対象（原因）が観察者の関心の対象でもあることが前提されていなければならない。そして、上の引用では、スミスはそのことを明確に自覚しているように思われる。

それでは、ここからは、道徳感情の「腐敗」に関するスミスの議論について検討していきたい<sup>25</sup>。

スミスはまず、議論の冒頭で、次のように主張している。

裕福な人々や有力な人々に感嘆し、彼らをほとんど崇拜し、他方、貧しく地位の低い人々を軽蔑するか、少なくとも無視する、というこの性向は、……われわれの道徳感情の腐敗の、大きな、そして最も普遍的原因である。富や地位がしばしば、英知や徳だけに与えられる尊敬や感嘆でもって見られ、悪徳や愚行だけを本来の対象とする侮蔑が

しばしば、まったく不当にも、貧困や弱さに向けられることは、すべての時代の道徳思想家たちの不満であった。<sup>26</sup>

このように主張したうえで、スミスは、道徳感情の腐敗に至る流れについて、以下のように説明している。

世間では、「英知」(wisdom)や「徳」(virtue)だけでなく「富」(wealth)や「地位」(greatness)も尊敬の対象とされる。そして、英知や徳はわずかな人にしか注目されないが、富や地位はほとんどの人に注目される。大多数の人は富や地位の感嘆者や崇拜者である<sup>27</sup>。また、

英知や徳に対してわれわれが感じる尊敬は、疑いなく、富や地位に対してわれわれが抱く尊敬とは違う。その違いを見分けるのに、きわめて正確な認識力が必要ではない。だが、この違いにもかかわらず、それらの感情は互いにかなり類似している。いくつかの個別的特徴については、それらは疑いなく違っているけれども、一般的な外観では、それらはほとんど同じに見えるので、不注意な観察者は一方を他方とよく間違えてしまう。<sup>28</sup>

さらに、ほとんどの人は、貧しい人や地位の低い人よりも裕福な人や地位の高い人を尊敬し、前者の真正で堅固な価値よりも後者の高慢や虚栄に感嘆する。たしかに、真の道徳からすれば、富や地位がそれだけで尊敬に値するとは考えられない。しかし、富や地位はほとんどつねに尊敬を得ており、それゆえ、尊敬の自然な対象と見なされる。そして、

それらの高い地位は、疑いなく、悪徳や愚行によって完全に引き下げられるだろう。だが、悪徳や愚行がこの完全な引き下げをなしうるには、それらはきわめて大きなものでなければならない。上流社会の人の不品行は、より地位の低い人の不品行ほど、軽蔑や嫌悪の目では見

られない。<sup>29</sup>

以上がスミスの説明であるが、分かりづらいところもあるので、いくらか補いながら整理してみたい。まず、(1)「尊敬」(respect)は、もともと、徳に向けられるものであるが、裕福な人や地位の高い人に感嘆するという人間の性向のために、富や地位にも向けられるようになる。そして、(2) 富や地位に対する尊敬は、徳に対する尊敬と異なるにもかかわらず、かなり似ているがゆえに、それと間違えられるようになる。さらに、(3) 裕福な人や地位の高い人の場合、悪徳や愚行に対する軽蔑や嫌悪は、富や地位に対する尊敬によって弱められるか、打ち消されることになる。こうして、道徳感情は、(裕福な人や地位の高い人に感嘆する性向から生じる) 富や地位に対する尊敬のために、本来の仕方で表れなくなるか、まったく表れなくなるのである<sup>30</sup>。

スミス自身は、道徳感情の「腐敗」の意味を明確には規定していない。そのため、「腐敗」を(1)や(2)とする解釈もありうる。だが、(1)は「誤用」や「濫用」と言うべきものであり、(2)は「混同」と言うべきものであって、「腐敗」と言っているのは(3)である。それゆえ、道徳感情の「腐敗」が意味しているのは、狭く取るならば(3)と、広く取るならば(1)から(3)に至る流れと解釈すべきだろう。

では、スミスは道徳感情の腐敗を必然的なものと考えているのだろうか。それについても、スミス自身の考えは明確ではない。先に見たように、スミスは、大多数の人は富や地位の感嘆者や崇拜者である、と述べている。それゆえ、裕福な人や地位の高い人に感嘆する性向を、人間にとって本性的なものとして捉えているように思われる<sup>31</sup>。だが、これも先に見たように、スミスは、不注意な観察者は英知や徳に対する尊敬を富や地位に対する尊敬と間違えてしまう、と述べている。それは、言い換えれば、注意深い観察者は英知や徳に対する尊敬を富や地位に対する尊敬と間違えることはない、ということである。したがって、裕福な人や地位の高い人に感嘆する

性向は本性的なものであるが、道德感情の腐敗は必然的なものではない、というのがスミスの考えであるように思われる。

さて、道德感情の腐敗に至る流れを説明したのに続いて、スミスは、道德感情の腐敗によって生じる事態について、以下のように論じている。

中流や下流の地位の場合には、「徳への道」と「財産への道」はほとんど同じである。

すべての中流と下流の職業において、真実で堅固な職業的能力が、賢明な、正しい、確固とした、節度のある行動と結びつければ、成功しそこなうことはめったにない。……また、そうした人々の成功は、ほとんどつねに、隣人や同等の者の好意や好評にかかっており、かなり規則正しく行動しなければ、これらはめったに得られない。……それゆえ、そうした地位においては、かなりの程度の徳が期待できる。そして、社会の真の道德にとって幸運にも、それらが人類のはるかに大きな部分の地位なのである。<sup>32</sup>

しかしながら、上流の地位の場合には、事情が異なる。成功と昇進は、無知で傲慢で自惚れた上位の者の気まぐれで愚かな好意にかかっている。富裕な人や地位のある人に感嘆するという人間の性向のおかげで、上位の者は流行を作ったり導いたりすることができる。上位の者の悪徳や愚行でさえ、流行のものとなり、多くの人がそれを真似ようとする。虚栄的な人は上位の者の豪華な生活を装い、貧しい人々は裕福と思われることを誇りとする<sup>33</sup>。そして、

この羨ましい地位に達するために、財産の志願者たちは、きわめて頻繁に、徳への道を棄てる。なぜなら、不幸にも、一方に至る道と他方に至る道は、時として、まったく反対の方向にあるからである。

野心的な人は、上流の地位に立てば、人々の尊敬や感嘆を集める多くの手段をもつことになるし、輝かしい行動によって、それまでの愚行を隠せると考える。国家の最高の地位をめざす者は、法律を超え、詐欺や虚偽、謀殺や暗殺、反乱や内乱によって、敵対する者を退け滅ぼそうとする。だが、野心的な人が高い地位を得たとしても、その名誉は、そこに至る手段の卑劣さのために、汚れたものに見える。その地位にあつて、彼は恥辱と悔恨に苛まれるのである<sup>34</sup>。

以上の議論は、一般には、スミスが徳と富の一致を唱えたものとして広く知られているが、道徳感情の腐敗という文脈では、力点はむしろ後半にある。スミスがそこで論じているのは、人間が富や地位を求めて、徳を棄て、悪徳に向かう、という事態である。それは、道徳感情が腐敗することによって、つまり、富や地位に対する尊敬が徳に対する尊敬や悪徳に対する軽蔑を凌駕することによって、生じるのである。

では、スミスはこの事態を必然的なものと考えているのだろうか。これについても、スミス自身は自らの考えを明確にしていない。スミスによれば、中流や下流の地位の場合には、徳への道と財産の道は一致する。人々は、有徳であれば裕福になるし、裕福になるには有徳でなければならぬ。それゆえ、先の事態が生じる可能性はほとんどない。そして、大多数の人は中流や下流の地位に属している。したがって、スミスはこの事態をむしろ例外的なものと考えているように思われる。

それでは、最後に、道徳感情の腐敗に関するスミスの議論について、大きな問題点を二つほど指摘してみたい。

一つは、道徳感情の公平性に関わる問題である。たとえば、利害の対立する二人の当事者のうち、一人が喜んでおり、もう一人が悲しんでいるとしよう。この場合、スミスの考えでは、他人の喜びに共感する性向は他人の悲しみに共感する性向よりも強いから、観察者は、後者よりも前者に強く共感することになり、両者に対して公平に判断することが難しくなるだろう。同様に、利害の対立する二人の当事者のうち、一人が裕福な人や



地位の高い人であり、もう一人が貧しい人や地位の低い人であるとしよう。この場合も、スミスの考えでは、人間には、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向があるから、観察者は、前者に感嘆して後者を軽蔑することになり、どうしても前者に有利な判断を下すことになるだろう。このように、スミスの考えに従えば、道徳感情は、その本性において、偏りを避けることができないのである。

この異論に対して、スミスであれば、そうしたことは現実には起こりうると反論するかもしれない。そして、公平な観察者の立場に立つことで、あるいは、道徳の一般的規則を基準とすることで、道徳感情の偏りを是正することができるかと主張するかもしれない。だが、そうであれば、道徳感情がその本性において偏りを避けることができないことを、スミス自身が認めなければならない。さらに、「公平な観察者」や「道徳の一般的規則」によっても、道徳感情の本性的な偏りを是正することはできない。なぜなら、先の異論はまさに公平な観察者を想定したものであり、また、道徳の一般的規則は偏った道徳感情しかもちえない人々のあいだで形成されるからである。

それゆえ、「他人の喜びに共感する性向は、他人の悲しみに共感する性向よりも強い」「人間には、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向がある」と主張することは、道徳感情の「公平性」を危うくする。この点で、道徳感情の腐敗に関するスミスの議論は、道徳感情の本性に関する議論と齟齬をきたしている。あるいは、この主張を維持するかぎり、スミスの道徳感情論は、道徳感情の現実を説明する理論になりうるとしても、規範倫理学の理論にはなりえない。

もう一つは、道徳感情の腐敗の必然性に関わる問題である。スミスは、徳に対する尊敬が富や地位に対する尊敬と異なると主張している。ところが、その徳の一つとして「慎慮」(prudence)を挙げている。スミスによれば、慎慮は、「個人の健康、財産、身分や評判、つまり、この世における個人の安楽や幸福がおもに依存していると考えられる対象に対する配

慮」に関わる徳である<sup>35</sup>。そこで、たとえば、慎慮によって富や地位を獲得した人物に対して尊敬の念を抱く場合、その尊敬が徳に対するものなのか、それとも、富や地位に対するものなのか、見分けるのは困難である。むしろ、その尊敬は、徳と富や地位の両方に対するもの、つまり、二つの尊敬が一体になったものか、重なり合ったものであり、それを二つに分離することは不可能であるように思われる。

だとすれば、スミスのように、道徳感情の腐敗は必然的ではない、とは言いきれないし、それゆえ、道徳感情の腐敗によって生じる事態は例外的なものである、とも言いきれない。とくに、自由で平等な社会であれば、先のような場合がむしろ一般的であるから、道徳感情の腐敗はいつそう必然的になる。

そこで、道徳感情の腐敗が必然的でないことを主張するのであれば、徳に対する尊敬が富や地位に対する尊敬と異なることを明確に立証する必要がある。たとえば、スミスと同じ感情主義者のハチスンのように、利益の知覚と異なる「道徳感覚」を提唱することで、あるいは、同じく感情主義者のヒュームのように、徳の感覚を「ある特定の種類の満足」と規定することで、それを立証することは可能である。だが、ハチスンやヒュームが徳の本性を情念の性質に求めているのに対して、スミスはそれを情念の適正な程度（当事者の情念が観察者の想像上の情念と一致すること）に求めている<sup>36</sup>。したがって、ハチスンやヒュームのような仕方では、徳に対する尊敬の特殊性を立証することは、スミスの道徳感情論そのものを破綻させる恐れがある。

（つげ・ひさのり 慶應義塾大学文学部教授）

【付記】本稿は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「社会的行動判断・意思決定のダイナミズムに関する人文科学、行動科学、神経科学の分野横断的統合研究」（平成24年）による研究成果の一部である。

- 1 同書からの引用・参照は、Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, *The Works and Correspondence of Adam Smith*, vol. I, D. D. Raphael and A. L. Macfie eds., Oxford: Clarendon Press, 1976／アダム・スミス（水田洋訳）『道徳感情論』（上・下）岩波文庫、2003 年、より、part. section. chapter. paragraph／邦訳の巻・頁、の順に記す（section や chapter のない part もある）。ただし、訳文はすべて拙訳である（〔 〕は訳者による補足）。なお、原典は第六版を、邦訳は初版を底本にしている。
- 2 スミスの道徳感情論に関する研究は数多くあるが、道徳感情の腐敗に関するスミスの議論について検討したものはあまりない。最も広範かつ詳細な研究として、田島慶吾『アダム・スミスの制度主義経済学』（ミネルヴァ書房、2003 年）第 5 章「スミスの道徳感情腐敗論」が挙げられる。それは政治経済学の観点からスミスの議論について検討したものである。本稿では、倫理学の観点から検討を試みたい。
- 3 Cf. I.i.1.2／上 25.
- 4 I.i.3.1／上 43-44.
- 5 Cf. I.i.1.1／上 23, I.i.1.5／上 28-29.
- 6 I.i.4.6／上 56.
- 7 Cf. I.i.1.10／上 31, I.i.3.10／上 50.
- 8 VII.iii.1.4／下 339-340.
- 9 III.3.3／上 310-311.
- 10 II.i.2.2／上 181.
- 11 III.4.8／上 329-330. Cf. III.4.7／上 328.
- 12 III.4.8／上 330-331.
- 13 Cf. III.4.11／上 331-332, III.4.12／上 332-333, III.5.1／上 336.
- 14 Cf. I.i.2.1／上 36, I.i.4.7／上 56-57.
- 15 II.ii.2.1／上 216-217.
- 16 スミスは、他人からの共感への欲求を「称賛への愛」とも呼んでいる。Ex. III.2.title／上 379.
- 17 Cf. I.iii.1.1-4／上 112-115.
- 18 I.iii.1.5／上 115.
- 19 I.iii.1.8／上 117-118.
- 20 I.iii.1.7／上 116-117.
- 21 I.iii.1.9／上 118.
- 22 Cf. I.iii.1.9-11／上 118-122.
- 23 I.iii.2.1／上 128-130.

- 
- 24 I.iii.2.2／上 132-133.
- 25 この議論は『道徳感情論』第六版で追加されたものである。
- 26 I.iii.3.1／上 163.
- 27 I.iii.3.2／上 164-165.
- 28 I.iii.3.3／上 165.
- 29 I.iii.3.4／上 165-166.
- 30 スミスは、貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向の場合について説明していないが、道徳感情の腐敗に至る流れは、裕福な人や地位の高い人に感嘆する性向の場合と同様、以下のように説明できるだろう。(1) 軽蔑は、もともと、悪徳に向けられるものであるが、貧しい人や地位の低い人を軽蔑するという人間の性向のために、貧困や弱さにも向けられるようになる。そして、(2) 貧困や弱さに対する軽蔑は、悪徳に対する軽蔑と異なるにもかかわらず、かなり似ているがゆえに、それと間違えられるようになる。さらに、(3) 貧しい人や地位の低い人の場合、徳に対する尊敬は、貧困や弱さに対する軽蔑によって弱められるか、打ち消されることになる。こうして、道徳感情は、(貧しい人や地位の低い人を軽蔑する性向から生じる) 貧困や弱さに対する軽蔑のために、本来の仕方では表れなくなるか、まったく表れなくなる。
- 31 スミスはまた、裕福な人や地位の高い人に感嘆し、貧しい人や地位の低い人を軽蔑するという性向は、階級の区別や社会の秩序を確立し維持するのに必要である、と主張している (cf. I.iii.2.3／上 134, I.iii.3.1／上 163)。このことから、スミスはこの性向を人間にとって本性的なものと捉えているように思われる。
- 32 I.iii.3.5／上 166-167.
- 33 Cf. I.iii.3.6-7／上 167-170.
- 34 Cf. I.iii.3.8／上 170-172.
- 35 VI.i.5／下 95-96.
- 36 拙著『イギリスのモラリストたち』(研究社、2009年)、83, 104, 120 頁参照。